私にとって「読む」こととは

秋光民恵

一、はじめに

「現代文」（現代国語）の授業は、生徒と生徒、あるいは生徒と教師との、いわば思想のぶつかり合いでありたいと思いつづけてきた。ところが私の授業は、私のありたいと望んでいたこととは、随分違いことを十何年間か繰り返している。私が教員になってしばらくは「自由に意見を言わせるが、どれが大切なことか、教えてくれない。」と生徒から指摘された。「ふーん、それもあるね、それもあるねと羅列しておいて、最後に先生の意見を述べるのは、押しつけだ。」とも生徒から指摘された。そのたびに頭をかかえたものの、基本的には、生徒の要求に現在も答えているとは思えない。この二つの生徒の指摘は、さまざまな問題提起を含んでいるようである。

一つには、「現代文」（現代国語）の授業は、自由にものが言える雰囲気がなければ、成り立ちにくいということである。一つの文章を共同作業として読み進める時、さまざまな考え、価値観を容認できる、学級集団づくりが基盤としてできてないと、生徒はもの言うことに恐れを抱き、ものを言う前に「違うと思うけど」とか、「わかりませんが」とかと自分で結論を出してしまう。まずものを言うことを、どう保証していったらいいのか、一つの発言をどう大切にし、全体に位置づけるのかが、授業の時いつも心に去来する。ところが、そんな私の姿勢が、結果としては生徒の発言を大切にしたことにならず、「言わせっぱなし」の状態に置いていたことになり、集団でもまれることなく、不安な答えがおずおずと並んでいるらしい。そのことの指摘であったのであろう。集団でもむことが、はなはだ困難であるので、私に授業でもっと交通整理をしてほしいという要求でもあったのだろう。

二つには、前述の項目にも関連するのであるが、教師の枠組みが最初から設定され、その教師の読みとりに、いかに速くたどり着くかが授業の展開であるかのような授業を、批判しているようである。生徒の根強い考えに「現代文には答えはない」というのがある。どう受けとめるのかは、個々の自由であるというのである。ところが私が授業で扱う大部分は「どう受けとめるか」を支えている、登場人物の生活の読みとりである。登場人物の生活は、文章の中でさまざまに規定され、読み手の想像にも範囲がある。その部分を授業で

は全体としては扱っているつもりであるが、しばしば登場人物の生活をどう受けとめるのかの内容に質問が及ぶので、「個々の自由」（しばしば勝手という含みを持っている）の範疇にまで枠をはめようとしていると受けとったのであろう。以上二つの生徒からの指摘を、私がどう受けとめたのかを述べたが、いまだに私の中で克服されないまま右往左往しながら授業をしているのが現状である。

二、「読む」ことの意味

「読む」ことは、読み手にとって意味のあることでなければならないと思う。私は意味のあることは、授業においては、生徒の意識を掘り起こす、生徒に問題意識を持たすことだと思っている。そのためには、教材から私自身がどれほど、私の生活、私の考え方を語られるかによっている。教材は、「現代文」（現代国語）の授業の中で生徒が選択したものではない。いわば与えられた文章として、登場してくる。（仮に生徒に教材を選択させる過程を取り入れたとしても、狭い彼らの情報から選ばれたものが生徒自身にとって意味のあるものとは思えない。）自分にとって関係のない、授業で扱うから読むといった消極的なかかわりがほとんどである。それが生徒にとって意味のある文章になるのは、自分の姿、価値観が文章を通して見えてくるようになってからだと思う。その作業は、授業担当者である私が、同様の作業を授業で展開することによって、可能になるように思われる。私は国語の授業では、いつも私がその文章（教材）から学んだことを基盤にし、私の感動・私の考えたことを、一つの発言として述べたいと思っている。その私が授業の一成員として、生徒と同じ「読む」ことの作業をどう進めていったかを語ることによって、生徒が「自分の感動・自分の考えたこと」を述べてくれると思っている。ただ生徒の発言がとびかうという状況はなく、集団の前で自分の考えを述べるのは、得意ではない。生徒の個人的趣味の部分についてのおしゃべりは、かなり的確であるようだが、人前でまとまった自分の考えを話すのに、いささか抵抗があるようである。だが、生徒が書くことによって、生徒が自分の考え、感想を述べることはできる。又生徒が書くことによって、個々の思いを私が把握することができる。一つの文章を教材化する時、書くことをできるだけ組み入れている。それによって読みが自分のものとして整理されていく。

三、取り組みの一例として

二年生の時に教材化した「山月記」と、三年生で教材化した「舞姫」との取り組みを報告したい。

(1) 「山月記」（中島敦）

N君のこと

広島県立賀茂
高等学校教諭
秋　光　民　恵

「国語Ⅱ」で中島敦の「山月記」をやっているが，言葉の抵抗が大きく，テーマを把握するのも容易ではない。しかし，秀才の誉れ高かった李徴が己の詩才を開花できぬまま虎と化す過程に，生徒が自らの挫折感を重ね合わせることができたら，「山月記」はもっと身近なものになるに違いないと思う。

「山月記」には，私たちの心の中に潜む「自尊心」／

↘と「羞恥心」とのかっとうがみごとに描かれている。この「山月記」をとりあげているとき，N君と交わした会話が思い浮かんだ。

N君は，彼の言葉によると「かっこをつけている」のだそうである。やや太めのズボン，それに比してやや短めの上着。髪は逆立ち，剃り込みがわずかに青い。そんな彼もしきりと，「クラブ（特にスポーツクラブ）をしている連中や成績のよい連中は，多少かっこをつけていても，教師に怒られることが少ない。だから自分もいい点を取りたい。」と思う。彼のこの言葉は今までを知っていた彼の生き方からは想像できないものであった。すなわち「己の珠にあらざることをおそれるが故に，あえて刻苦して磨こうともせず」「勉強するヤツ」を遠ざけていた今までの彼の生き方とは大きく違っていたのである。ところが，今までの積み重ねが確実でない彼は，少々の努力では思うような点は取れない。大学へは行きたいが，低迷している成績の前で，進路に迷い，たじろぐ。そんな彼の苦しみは，「山月記」の「己の珠なるべきを半ば信ずるが故に，碌々として瓦に伍することもできなかった」李徴の心情に一脈通じるものがある。

N君は「かっこをつける」ことで，教師の非難の目に遭い，その結果，彼の心は傷つく。そうまでして守りたい「かっこ」とは，N君にとって何なのだろうか。「わかってくれなくてもいい。」と寂しげにつぶやくN君の言葉は，本音だとは思わない。でも今，N君に彼の心をしっかりと見すえさせることは，「かっこ」でもつけんと「かっこ」つかん自分の空虚さを思い知らせることになるのかもしれない。N君の虎の話である。

上記の拙文は、私のクラスの一人の生徒と彼の生活をめぐって話し合っていた時と、「山月記」を教材化した時とが重なり、その生徒の中に「李徴」を見た、私の随想である。ただ「山月記」を教材化する時、生徒の揺れる心と挫折感とを「李徴」に重ねてほしいと思った。生徒は、進路の実現に向って毎日の学習を積み重ねているが、自分の望む結果がいつももたらされるとは限らない。その不安の中で努力することを放棄したいと思う。しかし努力しなかったことがもたらす結果も見えている。「やればできるが、やらないだけだ。」と思い、かろうじて自分を支えている。それは共通している感情であろう。だから「李徴」に自分を見た生徒達は、「こんな偉ぶった人間は嫌いだ。虎になるのは仕方がない。」と反発したり、「李徴はかわいそうな人です。虎になる前に、自分の心がつかめていたら、人間として生きられたのに。」と同情したりする。その反応は、「李徴」とどこかでつながっている自分への不安であったり、自分への慰めであったりしている。

(2) 「舞姫」（森　鷗外）

三年生の一学期の最後の教材が「舞姫」であった。「山月記」では、課題を作り、読みとる手順を提示しながら展開していったが、「舞姫」は意味の把握がまず課題となった。全体を分担して、生徒全員が意味を調べた。それをプリントにして配った。次に豊太郎がエリスと出会うまでの、豊太郎像を把握するための、課題を用意して授業で考えた。その後、豊太郎がエリスと出会い、離別する、最後の部分までは、各自の読みにまかせた。まとめとして、「太田豊太郎の生き方をどう思うか」を、八百字以内に書く作業を実施した。

その時の二人の生徒の文章を紹介する。

「舞姫」を読んで

佐々木　千　鶴

太田豊太郎のような人間は、案外多いように思う。というより、人には誰しも彼のような部分があるのではないだろうか。出世欲にかられて勉強し続けた豊太郎は、やはり最後まで出世欲に支配されていた。結局、最後まで彼は、それまでの自分に逆らえなかった。極言かもしれないが、豊太郎は自分で自分が変ったと思いこんだだけだったと私には思える。太田豊太郎は確かに真実の自分を見たのだろうが、変わるには至らなかった、それが現実ではないかと思う。真実の自分を見た時の衝撃が彼に自分は変ったのだと思わせた。だから彼は実際には変っていなかった。それが結論だと意う。彼が本当に変ったのなら悲劇は起こらなかった筈である。そしてまた豊太郎は、自分が変っていないという真実を認めることもせず、最後まで自分を被害者視し続けている。彼は最後まで自分を特別視することしかできなかった。

要するに豊太郎は、自分を誤解し、そして自分の非を認めることができなかったのではないだろうか。そしてそのことに気付こうとしなかったのではないか。それが結局は、悲劇をひきおこしたのではないだろうか。彼は結局、精神的には子供だったように私には思えて仕方がない。そして彼のそういう独りよがりともとれる部分は誰にでも存在すると私には思えるのである。ただ豊太郎は、ずっと優等生であったためにことが大きくなったのだと言っても極言ではないと思う。自分を誤解して、そのことに気付かずにいることは、誰にでもあることであり、時を経ない限り、それと気付くことは難しい。そして豊太郎の囲りには、彼にそうさせる条件がそろっていたのだから、豊太郎だけを責めることはできないと思える。結局私には豊太郎を責めることも、かといって彼の行為を認めることもできないのである。

舞姫を読んで

阿　部　清　信

何とゆーかほとんど文の意味は分からなかった。無論読みました。太田豊太郎とはまず、ものすごいエリートであったが、何か決断力がひどくとぼしくて、かなり優柔不断な所がある。エリスという少女が豊太郎という男をそう変えてしまったのか、はたまたもとからそうであったのかはよく分からない。だけどエリートだとはいってもエリスと共に暮らしている時に小さいながら、幸せを感じている所に人間らしさを感じる。そういえば最初の所に、「生きたる辞書たらむはなほ堪ふべけれど法律たらむは忍ぶべからず。」というのがある。普通あそこまで偉い人だと、自分が人間らしく思われようが、思われまいが、おかまいなし、という人も多い。しかし豊太郎は人間らしさがないといわれるのをひどく嫌っていた。これはやはり一味違うエリートと思いたい。ところが豊太郎は後にエリスをとるか、自分の名誉ある生活をとるか、という決断の時、名誉ある生活の方をとろうとした。エリスが倒れて家計(?)が苦しくなってきたからであろうか。どうもこの心境

の変化はよく分からない。もし、その時エリスとの生活が十分楽であったなら、通訳になろうとしただろうか。結局、我が身が可愛いだけの自分勝手な男だったのだろうか豊太郎は…。

最後の所で、良き友、相沢に感謝がどうとか…言っていたが。エリスをあんなにした原因をつくったのは彼だといってもいいくらいなのにどういう事なのだろうか。結局、彼らの様な人種からみると、愛だの恋だのを選ぶ人間は愚かだといいたいのだろうか。気の迷いだといいたいのだろうか。何というか最終的には豊太郎という人間に裏切られてしまった様で、いま一つ気持ちがすっきりしなかった。

紹介した二人の生徒の文章に限らず、全体的に豊太郎を「エリート・コース」を歩んだ人間として捉え、もろさや弱さを見ぬいている。それはある意味では、賀茂高校へ来たことの負い目が培った鋭さかもしれないと思う。そして豊太郎の生き方を理解する中で、彼の生き方の限界をも理解している。私が五年前に前任校で教材化した時の反応とは異る点である。五年前には豊太郎がエリスを捨てたことへの是非が主な反応であったが、今回は豊太郎に受験体制の中でのエリート像を見ている。豊太郎が家を興す、名を成すために勉強に、仕事に励んだことについては、全く共感されていない。同じ教材が読み手のかかえている生活、時代によって異った反応をしていることに驚いている現状である。

四、おわりに

「読む」ことは、自分の生活を見つめ、自分の考えをとらえ直す視点が生まれるとおもしろいのかなあと思っている。生徒の読みには時代背景や作者への簡単な説明を越えて、生徒の生き方から見えてくる人物像の把握がある。私にとっては、とてもおもしろい反応であった。

（広島県立賀茂高等学校）